

広報情報委員会 オープンスクール小委員会セッション

with コロナ時代のオープンスクールの在り方

The state of open schools in the with Corona era

(1) 原子力オープンスクール活動の今

(1) Current status of open school activities

吉田 茂生

東海大学 (OS 小委員会委員長)

1. 原子力オープンスクールの経緯

1992 年 (H4) 3 月、東海大学にて開催された日本原子力学会「春の年会」の際に、第 1 回オープンスクール (OS) が開催されて以来、31 年を経過することとなった。今日の生徒・学生に対する「理科 (理系)」離れ、特に「原子力・放射線」離れ、すなわち本知識に関する理解や関心の不足をくい止めることを主体とし、併せて一般市民に原子力・放射線に関する偏りのない、正しい知識を提供し、原子力・放射線の関心・理解を深めることを目的とした。これは支部組織 (北海道、東北、北関東、関東・甲越、中部、関西、中国・四国、九州、以上 8 支部) を中心に各地で開催され、公正で中立な学会が実施する原子力・放射線に関するユニークな教育・広報活動の場としても定着し、全支部にて年間 40 件弱の開催数を実施している。しかし、この経緯は順風満帆な活動展開とは言えず、2011 (H23) 年 3 月の甚大な被害を及ぼした東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故に伴っては強烈なショックと無力感を感じざるを得ない状況を迎え、さらに今日の新型コロナ渦では、OS の最も中核を成し機動力とする「対面・対話・密」を要するスタンスが奪い取られる状況を迎えるなど、開催縮小となったことは自明の理である。またこの背景では、中・高の学習指導要領の改正に伴い「放射線」が理科教育に 30 年ぶりに復活し、2021 (R3) 年度の全面実施へと大きく変化する場面も見られている。本企画セッションでは、この OS 活動の現状と今後の『With コロナ時代』に向けての展開について紹介し、次世代層へのより効果的な活動展開が議論できる機会の場となれればと考える。

2. 各支部での原子力オープンスクールの開催状況

各支部での展開は様々であり、①大学祭・オープンキャンパス等の活用、②大型研究施設・科学館等の活用、③出前授業 (科学体験教室・放射線セミナー等)、④科学イベント (科学の祭典等) への出展、⑤大学授業の活用、等々の場面に、霧箱や放射線測定、エネルギー・環境に関連した複数の科学体験コーナーへの参加体験・展示型のもの、また、講義・実験を体験するもの、施設見学を含めた体験実験など、各支部独自の工夫を凝らした活動展開がなされている。参加年齢層も対象により、親子から小・中・高校生、大学生、一般と、老若男女を問わず幅広い範囲の参加年齢層への対応となっている。また、支部間共通する点は、大学生・院生をスタッフとして起用し、現場にて参加者とのコミュニケーションに対応し易く心掛けられており、さらには準備段階より運営に関わる中で、若き人材育成につながるような対応に努力がなされている。

3. With コロナ渦での各支部原子力オープンスクールの展開

「三密」を避けたコロナ渦にあつては、これまでの対面重視から大きく対処方法を工夫せざるを得ない状況となった。施設等の活用については、開催の中止・延期・規模縮小等の対応は必至となる中、動画を制作し、コンテンツとして YouTube チャンネルにアップ、さらにそれらに対話型ライブ配信への対応に検討するなど、多数の工夫がなされた。また、出前授業もオンライン形式となったが、これまで直接現場にて対応する OS 担当者の代わりに、現場で対応する教員に実験等の対処に事前の十分な打合せを経て、ライブ配信を通じた対面的な対応を可能とし、現場担当教員の理解促進にも貢献できている。この様に厳しい状況下にあつても、決して「伝える活動を止めない、諦めない」とする強い使命感にて、徹底した新型コロナ感染防止対策を施し、各支部様々な工夫を施した形態にて、地道な活動展開がボランティア的に実施されている。

Shigeo Yoshida

Tokai Univ.